

# 合田強の『西洋醫述 卷三』に書かれた図の 原典から明らかになった事： (2) トーマス・バルトリン篇

板野 俊文

香川大学

受付：令和3年2月19日／受理：令和4年2月28日

**要旨：**合田強は江戸中期の讃岐の医家で、阿蘭陀大通詞の吉雄耕牛とその弟蘆風の成秀館で学んだ講義録五巻と、それらをまとめた一冊の本を書き残した。講義録の『西洋醫述 卷三』では、多くの解剖図の写図が書かれている。その中で、卷三の末尾に書かれている図の原典を検索し、トーマス・バルトリンの『解剖学』オランダ語版“Anatomia: ofte, Ontleding des menschelicken lichaems,” (1656) によることを明らかにした。未だに不明な部分が多い吉雄耕牛塾での解剖学の講義について知る上で参考になると思われる。

**キーワード：**合田強、吉雄耕牛、西洋醫述 卷三、トーマス・バルトリン

## 1 はじめに

合田強<sup>1)</sup>の『西洋醫述 卷三』(以下卷三と省略)<sup>2)</sup>は、宝暦十二年(1762)に大通詞の吉雄耕牛<sup>3)</sup>とその弟蘆風<sup>4)</sup>の成秀館で受けた講義録五巻中の第三巻である。筆者らは、卷三を翻刻し報告した<sup>2)</sup>。さらにその中に書かれている解剖図の原典について検討を行い、その一部はステーヴェン・ブランカールトとローレンツ・ハイスター(ヘーステル又はハイステルとも呼ばれた)によるものであることを報告した<sup>5)</sup>。また、『西洋醫述 卷四』に書かれた草木図の原典はドドエンス(ドドネウスとも呼ばれた)の『草木誌』であることも、併せて報告した<sup>6)</sup>。しかし、卷三にはこれ以外に書かれている解剖図も多くある。これらの原典がどのようなものであるかを知ることは、当時の成秀館におけるオランダ医学受容の方法を知るという面において重要であると思われる。

## 2 原典の作者名に至るまで

卷一、二では、講義内容をそのまま記録した文章部分が多いが、卷三になって多くの解剖図や外

科系の図が模写されている。その中でも、いくつかの図は丁全体に及ぶような大きな図と、メモ書き程度の小さな図がある。大きな図の中でもブランカールトの図は精密に模写されている<sup>5)</sup>。一方、必ずしも大きくはない図でも、かなり詳しく写された図と、外郭だけをなぞったような図がある。これらの図の原典は不明であった。これを解決するために、当時、成秀館に所蔵されていたオランダ語の本を調べてみた。片桐一男の成書に蔵書目録が書かれているので、以下に解説する<sup>7)</sup>。『因液發備』という翻訳書がある。百海鵬が書いた本で、吉雄耕牛が翻訳したとされる唯一の出版書である。何故、唯一なのか？耕牛自身も含め門人たちに成秀館におけるすべての講義内容は門外不出とし、一切の出版を禁じたからである。よって現在残っているのは、門人衆の手書きの各種の講義録ともいべき書物だけである。この『因液發備』は、耕牛の意図とは別に書かれ、彼の死後に日の目を見たこととなる。この中の「識語」の中に成秀館で所蔵されていたオランダの医学書が紹介されている<sup>8)</sup>。図1にそれを示す。

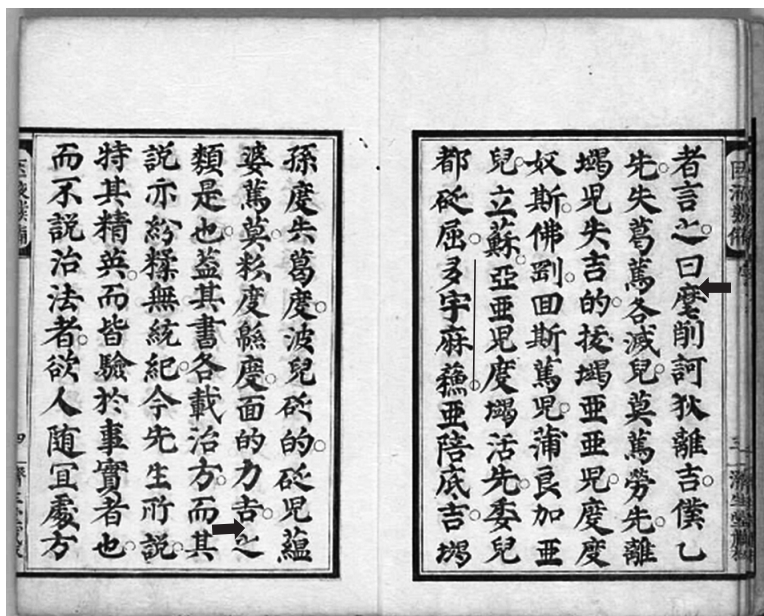


図1 成秀館に所蔵されていた20冊のオランダ医学書のタイトル。『因液發備』の三丁裏と四丁表<sup>8)</sup> 矢印で示した部分が成秀館の蔵書目録の20名の全著者名。直線で示した部分は「タウマス」と読める。

難解な漢字表記で列記している。それぞれの原書名については、当時の蘭学者間における習慣に従い、その著者名で呼んだり、書名的一部分で略称したりしている。読み仮名は参考として注に書いている<sup>9)</sup>。この中で解剖学、外科学、草木学に関連するものは、ヘーステル、ブランカール、ドドネウスであった。よってこれらの原本が成秀館にあったことが判ったので、論文を書く上で原典の図と講義録の模写図が一致するという傍証となった。というのも、照合をしてわかったことは、特に解剖学では似ているというような漠然としたものでは不可であることだった。よく似た図は多くの教科書に掲載されているからである。しかし、この中からどれが解剖学の教科書であるかは、わからなかった。著者名で書かれているからである。

そこで、当時の日本に入ってきていると考えられる本で解剖学の教科書を検討するという作業を始めた。『解体新書』の巻頭に掲載された一連の図はただ単にクルムスの“Anatomische Tabellen”（実際の原本はオランダ語翻訳版）の図だけではなく翻訳に関係した諸氏が所有するこれ以外の数

冊の解剖書からの図を模写している。それらは順番に木、火、土、金、水という略号をふられており、引用された図の横に符印が書かれている。最初の木は東米私解体書（官医桂川法眼蔵する所）、とある。これは『日本思想大系 洋学下』の『解体新書』の注によれば「デンマークの学者トーマス・バルトリン Thomas Bartholin (1616–80) の解剖書。」とある<sup>10)</sup>。名のトーマスが東米私となっている。その他の原本名や著者名は参考文献に示すが<sup>11)</sup>、姓が多い。何故、名なのかは後に明らかにするが、バルトリンはコペンハーゲンで、数代にわたって著名な解剖学者を輩出したために名で区別したと考えられる。ここで『因液發備』の名前をもう一度チェックした。図1の三丁裏の最後の行の上から4字目に「多宇麻蕪」という名があった（直線で示している）。これにより、トーマス・バルトリンの解剖書が成秀館に存在したことが判った。

### 3 トーマス・バルトリンの解剖学の検索

多分これであろうと考え、“Thomas Bartholin”をインターネット検索した。これらの情報は本来

なら参考文献の部分に示すべきであるが、鍵を解くための重要なものなので、概略を本文中に示す<sup>12-14)</sup>。

トーマス・バルトリン (1616-1680)

生死ともにデンマーク コペンハーゲン、  
一家の著名人で最初の人は、トーマス・フィンケ (1561-1656) で1603年にコペンハーゲン大学 (1475年開学) 医学部の教授となった。彼の息子はヤコブ (1592-1663) で数学と物理学の部長を務めた。また、彼の娘婿が生理学、解剖学者のカスパー・バルトリン (父) (1585-1629) であった。カスパーの6人の子息中2番目の息子がトーマス・バルトリンであった。しかし、トーマスは13歳の時に父を亡くす。

1634年にコペンハーゲン大学に入学、1637年にライデンに行き、医学を職業とすることを決定。ライデンではフランシスク・シルヴィウス (1614-1672) とヨハネス・ワレイウス (1604-1649) の助けを借りて、1641年に父が1611年に出版した “*Institutiones anatomicae*: 『解剖学教理』(ラテン語版)” の改訂版の初版を出版した。この時、トーマスは25歳であった。

しかし、1640年肺結核の脅威にさらされたトーマスは転地療法のためフランスを経由してイタリアのパドヴァに行き、健康を取り戻した。1645年には『解剖学教理』の第二版 (ヨ

ハン・フェスリングの協力)、1651年に第三版を出版した。この他の教科書で、本論文に関連するものとしては、オランダ語版で1653年、1656年、1658年版がある。

ここで何故に姓ではなく、名のトーマスを書かれていたのかが解った。当時の解剖学分野ではトーマスといえば、バルトリン家の息子であるということだったのである。代表的な著作を以下に記す。

*Bartholini T. Anatomia, ex Caspari Bartholini parentis Institutionibus.* 1651

*Bartholini T. De lacteis thoracicis in homine brutisque nuperrime observatis historia anatomica.* 1652

上記のようにラテン語版がよく知られているが、当時の輸入状況や通詞の語学力を考えるとオランダ語版が利用されたと考えられる。オランダ国立図書館のオンライン目録を利用して、Thomas Bartholinを検索することで情報を得ることが出来た。バルトリン解剖学書オランダ語版のうち、1653年版、1656年版、1658年版が閲覧できた。このうち1656年版の図は他のオランダ語版やラテン語版の図と左右が逆転していたが、合田強が模写した図とは、一致したので以下では1656年版を利用して解説する。

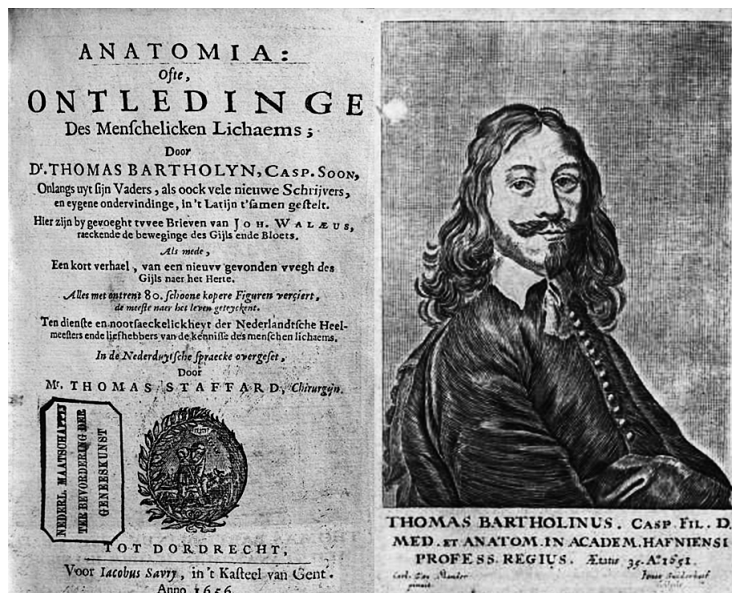


図2 トーマス・バルトリンの『解剖学』（オランダ語版）“Anatomia: ofte, Ontledinghe des menschelicken lichaems,” 1656年版の表題紙と肖像画<sup>14)</sup>

この中（1656年版）で合田強の講義録の巻三に模写された図があるか否かを検討した。

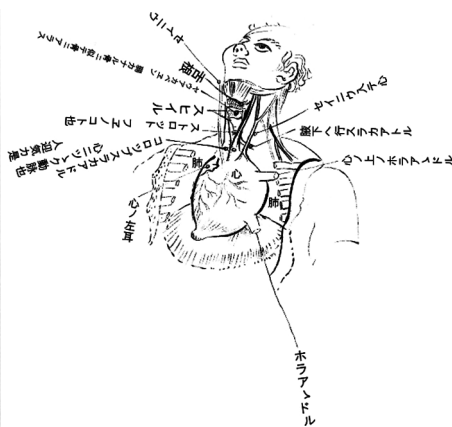
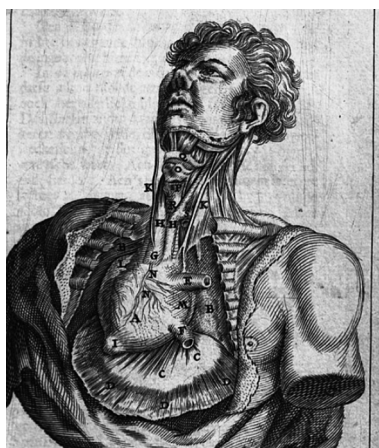


図3 バルトリン『解剖学』（1656年版）fol.195（左），合田強『巻三』の最後に模写されている図（右）

原図を模写したものと思われる。これらの原図の臓器の解説と、模写図の注意書きがほぼ一致することなどを考えれば、原図はこれであろうと推察できる。また巻き髪や、やや高い鼻などの顔の特徴もよく似ている。更に原典をよく見ると、あごひげをはやしているが、模写の方にもそれらし

きものが書かれている。なおこの図は左右が反転しているため注意されたい。我々が通常目にする図はラテン語版の図5（左）に示している。

次に、図3に関する臓器の情報をまとめたものを表1に示す。

表1

図の印	現在の通用名称等	模写図の器官名 <sup>注1)</sup>	オランダ語名 <sup>注2)</sup>
A	心臓	心	Hart
B	肺	肺	Longen
CC	横隔膜神経部		Middle-rijs zenuw achtige part
DD	同上筋肉		Selvs vleesige gedeelt
E	上大静脈	心ノ上ノホラアヽドル	Holle-Ader
F	下大静脈	ホラアヽドル	Holle-Ader
G	大動脈	コロツプスラカアドル	Groote slagh-ader (grote slagader)
HH	左右の総頸動脈		Krop slagh-aderen
I	心尖部		Punct van 't hart
KK	迷走神経	セイニウ入テ心	Zenuwin des seste paers
L	左心耳	心ノ左耳	Het lincker oorken
M	右心房		Het rechter oorken
N	冠状動脈		De van 't hart sacxhen
O	甲状軟骨		(Schildklier kraakbeen)
P	輪状軟骨		(Ring kraakbeen)
Q	舌骨	舌根	plaets van het tongt -been
R	気管	スロット フェノコト也	Strotte
S	右鎖骨下動脈	腋下へ行スラカアトル	Oxel-slagh-ader

注1) 吉雄耕牛の訳を書き入れた物

注2) 原点の図の解説より抜粋した臓器名. カッコ内は現在の通用名称

この中でE, Fで示された「ホラアヽドル」は「Holle-Ader」であり, KKで示された「神経」は「Zenuwin」である. またGとHHは情報が混ざっているが, 「大動脈」の「slagh-ader」という語など

も見ることが出来る.

次に, それ以外で似たような図があるか否かを検討した.

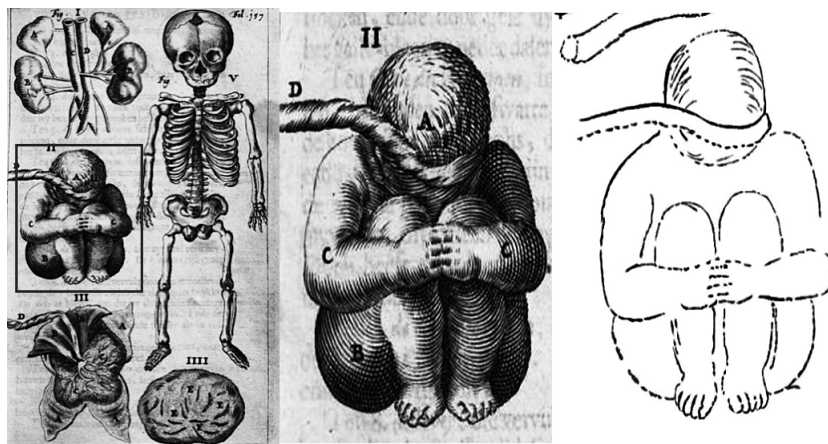


図4 バルトリンの『解剖学』(1656年版) fol. 157 (左), fol. 157のIIを拡大したもの(中), 合田強『卷三』に写されている図(右)

図4の拡大図に示した胎児の図であるが、これも模写されたものと考えた。このような図は他の解剖書には、見当たらないことも一因である。

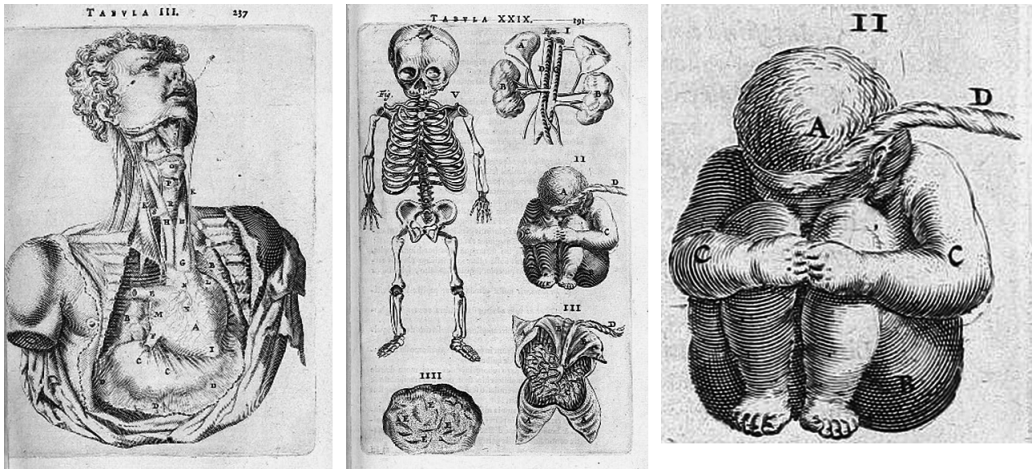


図5 トーマス・バルトリンの『解剖学』（ラテン語版）1651年版<sup>15)</sup>

1651年のラテン語版(3版)から図3, 4との共通部分を示す。他の年代のラテン語版やオランダ語版(1653年, 1658年)もそうであるが、左右が逆になっている。しかし、1656年版の図だけが、

模写図と一致することから、成秀館に所蔵されていたトーマス解剖書は1656年オランダ語版であることが示唆される。

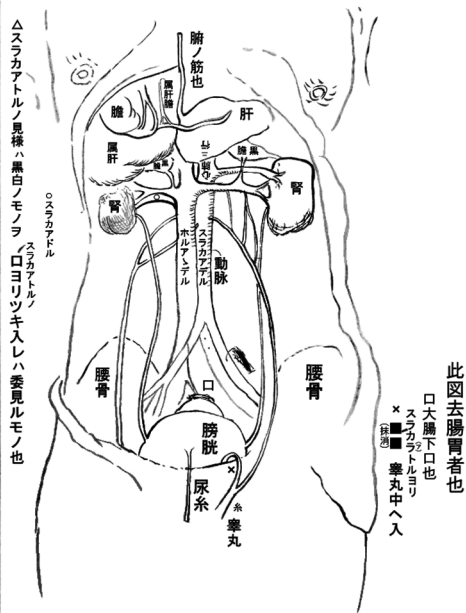
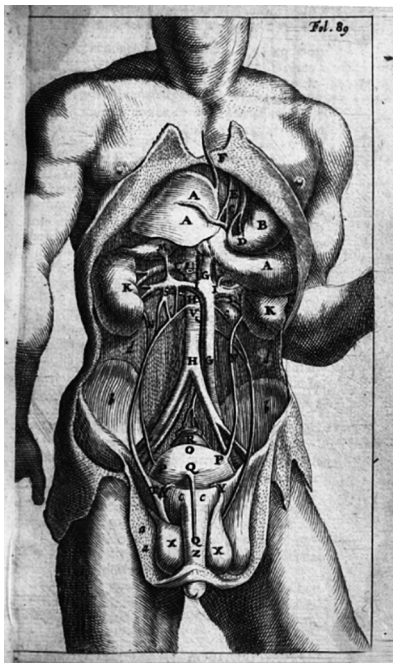


図6 バルトリンの『解剖学』（1656年版）fol.89（左）、合田強『卷三』に写されている図（右）

血管を中心に書かれた図である。『卷三』の解説にあるように、腸胃を除いたものである。各血管の太いものから、細いものまで忠実に書かれている。さらに模写図では膀胱から出た「尿糸」まで書いている。成秀館では細い管を「糸」と訳し

たようである。トーマス・バルトリンが脈管系の専門であったことを、考慮すればこのような図を掲載したことは理解できるし、吉雄耕牛もそれを知って、合田強に模写を命じ、個々の臓器や血管系の説明を追加したと思われる。

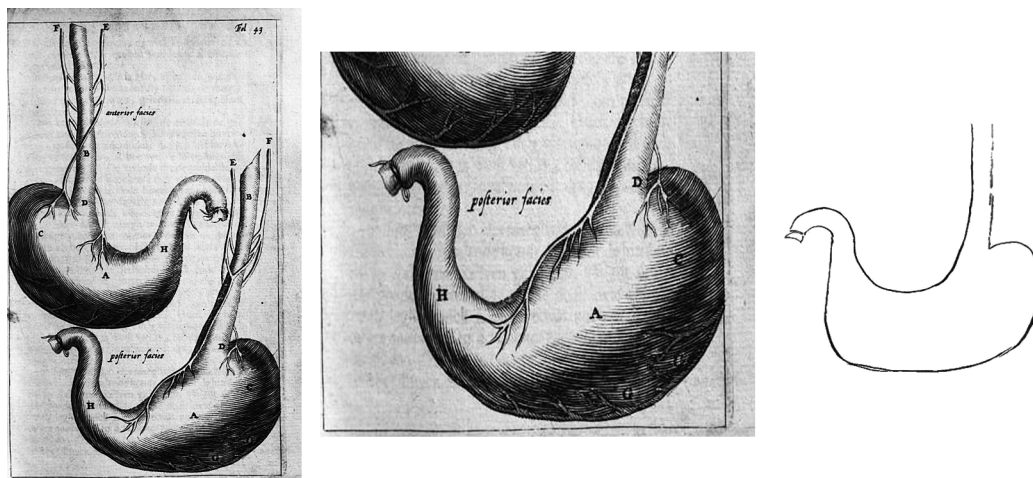


図7 バルトリンの『解剖学』(1656年版) fol.43 (左, 中), 合田強『卷三』に写されている図 (右)

前の図に腹部の項目に載せられた胃の模写図を示す。これが他の解剖書と異なるのは十二指腸上部を縫合糸でくくっている部分でこのような胃の図は他にはないので、引用した。

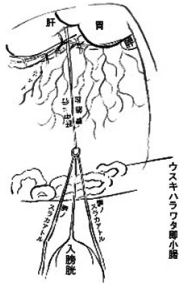
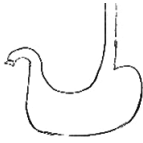


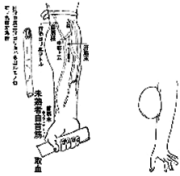



お巻三は一部外科系の模写図を除いて、講義録全5巻中では、解剖学の模写図が多いので、参考論文5に模写された図(9枚)と本論文で模写された図(7枚)であり、他は不明の3枚であることを明らかになった。

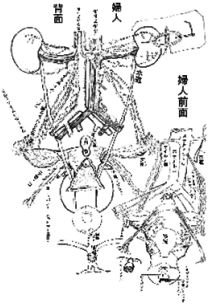
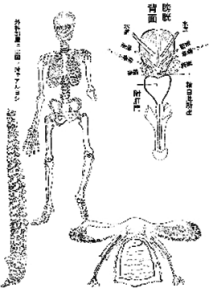



次に可能な限りよく似た図の照合を行った。な

表2 引用した論文の図と原典をまとめた

引用論文 <sup>注1)</sup> のページ	引用論文 <sup>注2)</sup> とページ数等を示す	模写図
p. 90 上段	心臓 A p.393. 腎臓等 A p.392. 肝臓 B 腎臓等 B	

p. 90 下段	B	
p. 89 上段 右	不明	

p. 89 上段 左	A p. 391 下段	
p. 88 上段	B	
p. 88 下段	B	
p. 85 上段	不明	
p. 85 下段	A p. 394	
p. 84 上段 右	左上の髪の部分 A p. 395 下段	
p. 84 上段 左	不明	
p. 84 下段	左上 胎児 A p. 395 上段	

p. 83 上段 右	A p. 390	
p. 83 上段 左	A p. 389	
p. 83 下段	上 A p. 391 下 B	
p. 79	A p. 392 左	
p. 78	B	

注1) 引用論文(板野俊文, 田中健二 合田強の『西洋医述 卷三』の解題と翻刻 日本医史学雑誌 2016; 62(1): 75-92)に掲載された図のページ数を示す。  
 注2) A: 引用論文(板野俊文, 合田強の『西洋医述 卷三』)に書かれた図の原典から明らかになった事。日本医史学雑誌 2020; 66(4): 386-399)に掲載された図のページ数等を示す。  
 B: 本論文に掲載の図を示す。  
 A論文の模写図は9枚, B論文の模写図は7枚, 不明は3枚であった。



#### 4 まとめと考察

合田強の成秀館における講義録5巻の中の第3巻の『西洋醫述 卷三』に模写された解剖図の一部の原典を検索し、トーマス・バルトリンの『解剖学』であることを示した。

巻三や巻四で、既に報告しているステーブエン・ブランカールト<sup>5)</sup>、ローレンツ・ハイスター<sup>5)</sup>、レンベルト・ドドエンス<sup>6)</sup>の原典に加えて、今回報告したのは第4番目の原典である。さらに、これらの図が書かれた日にちは異なっており、例えばバルトリンの教科書が使われた日は「循環、脈管器系」(4月16日と閏4月16日の講義、以下同様)の、ブランカールトの教科書が使われた日は、「解剖学一般、または産婦人科系」(閏4月23日)の、ハイスターの教科書が使われた日は、「瀉血等を含む外科系」(閏4月11日)の、ドドエンスの場合は「本草学系」(閏4月16日)の講義が行われたことがわかる。しかし、原典はこれだけではないだろうということはわかっている。というのも、まだ原典不明な模写図が多くあるからである。解剖学に加えて外科学や内科学の内容も多く含まれているので、これらを全て解明することは困難であろう。現在、別の原典の検索を行っている。模写図があることは、原典を検索することに大きな参考になる。

#### 謝辞

写図を作成して頂いた香川大学名誉教授 田中健二先生に感謝いたします。

#### 参考文献および注

- 1) 合田強について。(富士川游. 温恭合田求吾先生. 中外医事新報 1936; 1238: p. 1-9 (原典) 復刻 富士川游著作集 第七巻 京都: 思文閣出版 1980. p. 339-341 この文献より略歴をまとめた.)  
享保9(1723)~安永2(1773). 讃岐国豊田郡和田浜生まれ(現香川県観音寺市). 父は合田伝右衛門吉盤. 弟は合田大介(蘭齋). 名は強, 字は千之, 通称求吾, 号は巨鼈, 鼈山. 幼少の時, 合田又玄, 高橋柳哲について医を修め, 宝暦2年(1752年)2月京都にて松原一閑齋に医と儒を学んだ. その後, 長崎にて吉雄耕牛・吉雄蘆風に学んだ. 墓は香川県観音寺市豊浜町

和田浜.

- 2) 板野俊文, 田中健二. 合田強の『西洋医述 三』の解題と翻刻. 日本医史学雑誌 2016; 62(1): 72-92 この時に翻刻したのは香川大学医学部図書分館に所蔵されている本である。これは原本のコピーが製本されたものである。原本は合田強の末裔によって香川県立ミュージアムに寄贈されている。また、多くの合田家関係資料は模写され、坂出市の鎌田共済会郷土博物館に保存されている。論文に使用した図は模写図を作成し、説明文を加えた。
- 3) 吉雄耕牛について。(片桐一男. 江戸の蘭方医学事始 阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門 耕牛). 東京: 丸善ライブラリー; 2000. P. 231-240 この文献から略歴をまとめた.)  
享保9(1724)生 長崎 寛政12(1800)長崎で他界, 享年77歳であった。江戸時代中期の阿蘭陀大通詞であり, 蘭方医として吉雄流外科を開祖した。名前は初め定次郎, 次いで幸佐衛門, のちに幸作, 幸載と称す。諱は永章, 号が耕牛, 養浩斎, 成秀館ともいう。耕牛は長崎の通詞吉雄藤三郎の長男に生れ, 少年時代から出島のオランダ商館に出入りして, 寛保2年(1742)年の19歳のときに小通詞になり, 寛延元年(1748)には大通詞となった。
- 4) 吉雄作次郎(永純)について。(片桐一男. 洋学史事典 日蘭学会編 昭和59年 東京 雄松出版 p. 736. この文献から略歴をまとめた.)  
享保10年(1725)生まれ, 安永6年(1777)に他界し, 享年53歳であった。永純は江戸中期の阿蘭陀通詞で諱は永純である。阿蘭陀通詞吉雄藤三郎の子で幸左衛門(耕牛)とは1歳ちがいの弟であり, 耕牛とは別家をたてた。寛保2年(1742)に稽古通詞になり, 宝暦8年(1758)小通詞末席に, 明和3年(1766)小通詞並に, 同8年(1771)小通詞助役となった。安永6年(1777)10月4日歿している。
- 5) 板野俊文. 合田強の『西洋醫述 卷三』に書かれた図の原典から明らかになった事. 日本医史学雑誌 2020; 66(4): 386-399
- 6) 板野俊文. 合田強の『西洋醫述 卷四』に書かれた図の原典から明らかになった事. 日本医史学雑誌 2021; 67(1): 48-64
- 7) 文献3, P. 101-103
- 8) 因液發備. 国文学研究資料館所蔵 吉雄 永章 口授, 百百海鵬洋椿編, 富田 貞元祐, 吉雄 懃 自朗 校, 文化一二序, 同刊 新日本古典籍総合データベース (nijl.ac.jp) <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100241029/viewer/1> (2021年2月5日閲覧)
- 9) 文献3, P. 101-103
- 1) 摩削訶狄離吉 ホイソウホウグレイキ 2) 僕乙先 ボウイセン 3) 失葛篤各減兒 シカウツカーメル  
4) 莫篤勞先 マツロウゼン 5) 離堀兒失吉的 レイゴロシキヂ 6) 拔堀亞亞兒 バダアールト  
7) 度度奴斯 ドドネウス 8) 佛剛 フカン 9) 回斯篤兒 ヘースダ 10) 蒲良加亞兒 ブランカール  
11) 立蘇 リス 12) 亞兒度堀活先 アールドゲワッセン 13) 委兒都砵屈 ウルツベング

- 14, 多字麻蘇 (タジマソ) 15, 亞陪底吉 (アヘイヂキ) 16, 堀孫度失葛度 (ホリムネドシカフド)  
 17, 波兒𦵑的 (ハエリ𦵑的) 18, 𦵑兒濫婆篤莫 (𦵑エリランパトクモク) 19, 粉度𦵑度 (コノド𦵑度)  
 20, 面的力吉 (メンリキキ)
- 10) 小川鼎三, 酒井シヅ. 解体新書. 広瀬秀雄, 中山茂, 小川鼎三校注者. 日本思想大系 65. 洋学 下. 東京: 岩波書店; 1972. p. 207–359
- 11) 文献 10, p. 216
- 木 東米私解体書 (官医桂川法眼蔵する所)  
 火 武蘭加兒解体書 (同)  
 土 加私巴兒解体書 (翼蔵する所)  
 金 故意的爾解体書 (同, 羅句語を以て記す)  
 水 安武兒外科書解体篇 (中津侍医前野良沢蔵する所)
- 12) Thomas Bartholin の略歴の一部は以下の参考文献と 13, 14 の文献によった.
- C. D. O'Malley. "Bartholin Thomas", Editor Gillispie, Charles Coulston. Dictionary of Scientific Biography. Charles Scribner's Sons, NY 1980.
- 13) I. H. Porter, Thomas Bartholin (1616–80) and Niels Steensen (1638–86), Master and Pupil. Med. His. 1963. 7(2): p. 99–125
- 14) Bartholin, T; Bartholin, C: Anatomia: ofte, Ontleding des menschelicken lichaems, [Internet] Dordrecht, Jacobus Savry, 1656. [cited 2021, February 5]. Available from <https://books.google.co.jp/books?id=2CtmAAAAcAAJ&printsec=frontcover&hl#v=onepage&q&false>
- 15) Anatomia, ex Caspari Bartholini parentis Institutionibus, Bartholin, Thomas, 1616–1680; Walaeus, Johannes, 1604–1649. Epistolae duae de motu chyli et sanguinis ad Thomam Bartholinum; [Internet] Batav., Apud Franciscum Hackium Lugd. 1651. [cited 2021, February 5]. Available from <https://archive.org/details/anatomiaexcaspar01bart/page/mode/thumb>

## What Was Clarified from the Original Source of the Figures in Goda Tsuyoshi's "Seiyo Ijutsu Vol. 3": (2) Thomas Bartholin

Toshifumi ITANO

Kagawa University

Tsuyoshi Goda was a doctor in Sanuki in the middle of the Edo period. He wrote five volumes about the lectures he heard at Seishukan, which had been administered by Yoshio Kogyu, a Dutch language interpreter, and his younger brother Rofu. He also wrote one book summarizing them. In Volume 3 of the lecture record, many anatomical drawings were included. In it, I searched for the original source of the figures at the end of Volume 3 and found that it was the Dutch version of Thomas Bartholin's "Anatomia: ofte, Ontleding des menschelicken lichaems" (1656). This will be helpful for understanding the anatomy lectures at Yoshio Kogyu Juku (Seishukan), about which there are still many unclear points.

**Key words:** Tsuyoshi Goda, Kogyu Yoshio, Seiyo Ijutsu Vol. 3, Thomas Bartholin